2018 年南仏　アヴィニョン・フェスティバル・オフ　参加報告

花柳　衛菊

箏演奏者　悦子さんと

2018 年 7 月 11 日夜 10 時 45 分、アヴィニョン TGV 駅に私たちは降り立った。パリ、シャルルドゴール空港から 3 時間 15 分、東京羽田を飛び立ってから 18 時間の、2m 長さ、胴回り 1m程の梱包された巨大な 16 ㎏のお箏を抱える川口悦子さんとの長旅であった。いつものタクシー運転手、シャユーンの出迎えを受け、箏の他、旅行バッグ 4 つ、リュック 1 つとの悪戦苦闘の小柄な女二人旅からようやく解放された。いつものことながら、旅行の最大の難関は TGV の乗車である。巨大な荷物をいくつもかかえ、駅のホーム掲示板に表示された乗車位置はあいまいで、見当を付けた場所から.5～6m離れていることもしばしばで、同じ車両に乗る人々があちこちから入り口に殺到し、皆が我先にと乗り込む中、人々をかき分け、TGV 車両のホームとの段差にあえぎながら重くて大きい荷物をよろよろ引っ張り上げ、車中の狭い入口スペースに押し込む。乗る時に注意しなければならないのが、改札がなく、誰でも乗り込める車内でのスリだ。親切そうに寄ってきてバッグを荷物棚に乗せる手伝いをする振りをしながら、ショルダーバッグからお財布を抜き取り、列車が発車する直前に降りてしまう。今年も若い女性 2 人に付きまとわれた。数年前に友人が財布を抜き取られた手口と同じである。近くのフランス人が気付いて追い出してくれた。こちらフランスの人は、大荷物にあえいでいても、スリに間違えられるのを恐れてか、自分の荷物で一杯なのか、列車に乗り込む時、いつもの親切心はなく手を貸してくれることはほとんどない。

シャユーンの手際の良さで、長い箏も車に無事収まり、片言の英語で彼女と話をしながら、タクシーは劇場とアパートのあるアヴィニョン旧市街に向かう。10 分程して旧市街の城壁が見えてきた時、思わず「ただいま」と口ずさんでしまった。18 年間通い続けた町である。私にとってもう第二の故郷なのだ。

花束をもらって。ルーカスと

また例年のように、翌日のリハーサルを経て、13 日間のアヴィニョン・フェステイバル・オフ参加の連続公演が始まる。今年の音響・照明スタッフはオーストラリアから来たハンサムボーイの技術者兼ミュージシャン、ルーカス。チケット売りのボックスオフィス担当が、計算が苦手なスイス人のマーク先生。彼は私の直前に、映像とおしゃべりの講義のような公演をする。私の公演のお客様対応と公演中のキューサインをルーカスに伝えるのが、日本から一足先にアヴィニョン入りした元一流企業勤務の大学の同級生、広美さんだ。生真面目だが少し不慣れなスタッフに支えられた公演が始まる。今年はどんな事が待ち受けているのだろう。

会場は、城壁のすぐ外を流れるローヌ川に掛かるアヴィニョン橋の、城壁内にある入り口直ぐ脇、

メルキュールホテルのパーティ会場ベネゼである。ひまわり畑や森に沿った緑豊かなローヌ川の中程までしかない、”輪になって踊ろう”の歌で有名なあのアヴィニョン橋である。私の公演するガレージシアターは大きさ 6m×10m程のベネゼに黒幕を張り 5m×5mのパネルを敷いて舞台とし、残り半分に椅子を二十数脚置いただけの仮設シアターである。天井は低く白い。照明は横左右、前左右、中央前方のみで、それぞれが低い位置にあり、直接光源が目に入るので、眼くらみしてしまい、目の位置を常に注意しなければ体のバランスをくずす。ガレージシアターは 120 程あるフェスティバル・オフ参加会場の多くがひしめいている中央東側から徒歩 10 分程離れた城壁沿いにあり、最寄りの劇場からも 300m程度離れ、この城壁に囲まれた小さな直径 1.2ｋ程しかないフェスティバルが行われているアヴィニョン旧市街の中では、繁華街から離れた静かな住宅地のような場所にある。ある日本人ダンス批評家が「設備も場所も、もっといいところで公演をしないと、お客はもちろんプレスや批評家も来ないよ。」とアドバイスをしてくれた。もちろん私自身、会場が集中している中央のフランス人経営の有名劇場（と言っても客席は 30～100 位で学校や教会をシアターにしている）で公演をしたいのだが、このガレージシアターを経営しているオーストラリア在住のインド舞踊・舞踊家、シャクティの魅力と、私でも負担できる公演費用、ソロが似合う会場の小ささ、少ないお客様でも満席になり、空席を気にすることなく公演ができる等、あまり目立たずひっそりと自分サイズの公演ができるのが魅力で 18 年も通い続けている。そして何より 18 年間「ガレージシアターの 13 時公演」が私の顔になっているので、そうそう劇場を乗り換えることはできないのである。

町中に貼られている公演ポスター

今までもあまり気乗りしなかったのであるが、今年はさらに宣伝活動に消極的であった。無理に宣伝をしなくても毎日 20 名程が集まって下さる安心感、来たいお客様だけ来て下さればいい、という開き直り、毎年同じ時間に同じ会場でやっているので、アヴィニョン通にはわかっているだろう、日本舞踊はマイナーな分野なので、興味がある方は 120 の劇場で繰り広げられる約 1400 公演が載っている OFF 雑誌で探し出してくれるだろう、等いくつも理屈を並べて、チラシ配りも、ところどころにある場所へのチラシ置きも怠けてしまった。しかし何より宣伝活動への気持ちが動かなかったのは、自分の年齢のせいかもしれない。この年にもなって、作り笑顔で「ボンジュールマダーム」と自分のチラシを渡すのが苦痛になってきたというのが本音だろうと思う。町中の壁や塀に、所狭しと貼られているポスターと競合するには余りにも自分の公演がひっそりとし過ぎているからかもしれない。兎に角も世界に誇るアヴィニョン・フェスティバル・オフ公演 1400 の自分は一部で、他の公演演者と引けを取らない、と言い聞かせ続けることに精一杯で、自分の踊りだけは手を抜けない

チラシ置き場（中央が私のチラシ）

道にピアノごと繰り出して宣伝活動

という張りつめた気持ちが強く、宣伝活動まで気が回らない、というのが真実だろう。演者自ら通りすがる人々に宣伝をするここのやり方には、オープンに成り切れない日本人にとって大変な覚悟とエネルギーがいる。20 名のお客様を 25 名にする努力より、毎日の公演を後悔なく精一杯勤める事が私にはとても大切で、日本に帰った時、自分の作品が成長していること、あわよくば自分自身の技術が向上していることがフェステイバル参加の目的だからだ。ただチケット収入を手にした時、もう少し宣伝活動をすればよかった、と思うことは例年通りなのだが。

作品と技術の向上が渡仏の目標と書いたが、実は最大の目標は別にある。それはここで演じられている公演達の密度を知る事である。1400 もの公演があるここの演劇祭で引けを取らないことは容易なことではない。どの公演もプロとして確かに人々をひきつける何かがある。アイデアの積み重ねと技術の確かさがほとんど全ての公演にあるのだ。なぜこんなにどの公演もレベルが高いのだろう。

4 組しかない日本からの参加カンパニーで、初参加の 20～30 代のグループに相談された。「自分たちの公演はどうでしょうか。」若い将来ある彼らに思わず言ってしまった。「このフェスティバルに参加している公演の密度を学びなさい。自分のやり方、主義、主張は変えることはない、自信を持って自分がよしとすることを進めなさい。ここの演者達の真似をすることは一切必要ない、自分が進めていることが、あなた方のアイデンティティだし、誰にもできない個性だから。ここでは個性、独自性がなければ立ち行かない。ただしここでの公演達と同じ密度になるまで努力しなければ。ここで自分の作品の薄さに気付き、厚みを増さなければ。それはアイデアの密度かもしれないし、稽古量の問題かもしれないし、技術の不足かもしれないし、準備に掛ける時間の差かもしれない。」自分の子供世代の彼らに、自分のことを顧みずに思わず力んでしまったが、実は自分自身にも常に言い聞かせていることである。今まで日本から来る若いグループの、基礎になる技術を持たない密度の薄い公演を数多く見てきた。

技術の確かさとアイデアの積み重ねがあっても全ての公演が成功しているわけではない。そこにセンスという大切な要素が加わらなければならない。感覚の良さ、感性の素晴らしさ。音楽、構成、振付、演技、演出、美術、衣裳、照明。そこまで考えると、自分が見た 30 近くの公演の中でもわずかな公演しか挙げられない。今年の私のお気に入り公演は 4 つ。完璧なカウント管理の振付、よく考えられた構成、技術の確かさ、美しい照明、簡素だがすっきりとした衣裳の台湾政府が派遣しているダンス「Déjà vu」(既視感)、音楽演奏家と衣裳とウィットと命がけのヒップホップダンスが融合した「Glaucos」(海神グラウコス)、簡素なパネルを次々と移置変えし、壁沿いに掛けた人形を順に登場させ、しゃべりながら、人形たちに命を与えた日本の文楽のような 3 人の人形使い

法王庁で行われたダンス公演のカーテンコール

の公演「Bon debarras!」(素敵な物置部屋)、そしてフェスティバル主催のイン公演の顔である法王庁で夜 10 時から始まった最終公演、歌の祭典。17 人の歌手たちが中庭に設えられた大舞台に順次登場しては美しい歌声を聞かせる。彼らは踊ることなく、ポーズすることなく淡々と歌う。濃紺の夜空、700 年の歴史を刻みこんだ城の壁、湿気を帯びた涼風、個性ある澄んだ歌声。演出を最小限に抑え、技術の確かさだけが際立った本当に心地よい濃密な時間だった。

センスの良さと密度。自分は彼らに対抗するために、現代邦楽と現代作家の着物と邦舞の一体化を目指している。海外にはない陰影を含んだ、日本人が創りだしている素晴らしい音楽と美しい着物と邦舞の動きに助けてもらうのだ。そして、ソロで踊ることにこだわっている。日本の芸能は個人の技を見せることに主軸を置いていると考える。ソロで踊ることはすなわち、一人で延々と悩み、創ることができる。ここで戦うには、時間を掛けて創り、1 年を掛けて毎日稽古をすることが必須である。こちらの多くの公演が集団の密度で押してくるからには、他の方法で立ち向かうしかない。そして今年、初めて、自作ではない古典をプログラムに加えた。私が日本舞踊を始めるきっかけになった「山姥」だ。母に連れられて門をたたいた瀬川仙女先生の「山姥」に吸い込まれるような思いをしたことが今でも忘れられないのだ。この古典で、今年、アヴィニョンで戦ってみよう、と思った。

イギリス・エディンバラ 3 回、カナダ、オーストラリア、そしてフランス・アヴィニョン 18 回、計 23 回のフェステイバル参加の収穫は何と言っても人との繋がりである。フランスに通って十数年経ったころ、現地で根を張る日本人の方達が声を掛けてきてくれた。ヨーロッパでのダンス公演をくまなく鑑賞して批評を日本に送り続けている M さん、パリの小さな劇場のプロデューサーをしている T さん、パリの国立のコンセルバトワールでダンス教師をしている日本の舞踊界でも要職についている K 先生。M さんから今年の公演に効果的な助言を頂き、また、フランスの事情も詳しく説明して下さり、次への大きな目標も見えてきたし、T さんの計らいで以前パリ公演ができた。また、K 先生が一昨年と今年、パリ近郊でアトリエ公演をして下さった。そして皆が紹介してくれるのが、日本文化を愛するフランス人や日本人である。パリに夢を持って渡り、自分の道を切り開いてきた日本の方々はその道のりは険しくても、今はしっかり現地に溶け込み、花開き、活躍している。

アヴィニョンの別荘に招かれて

K 先生宅すぐ近くのポプラ並木

そのような日本人が私に手を差し伸べてくれるのだ。日本で人知れず個人活動をしている我が身には本当に有難く嬉しい。この方々との交流は 20 年という歳月をかけてようやく手に入れたものだと思う。常に危険と不便が隣り合わせでも、彼らが日本に帰らないのは、この国の文化の厚みからくる精神的な豊かさと昔からの調度や建物、風景を大切にする住環境の美しさ故だと思う。そして日本との関係を保ちながらオンリーワンの活動をする。私自身、日本では不可能

な連続公演を目指してヨーロッパに渡り、18 年間アヴィニョン・フェスティバルを演者の立場から見続けたたったひとりの日本人なのだから、根気があれば海外ではオンリーワンになることができるのだ。

7 月 13 日から 25 日の公演を終え、アヴィニョンを発ちパリへ着いた 27 日の夜に K 先生が主催して下さったご自宅でのアトリエ公演は、数年ぶりのパリの酷暑の日であった。3 階の稽古場を使った公演は屋根の熱気が直接響き、暑さでむんむんする中で行われたが、皆しんと静まり返り、踊りと箏の音色に満足して下さっていたように思えた。そこでは、アヴィニョンでやりまくった公演とはまた違ったむせ返る空気と同じような熱気を感じ、これですっきり日本に帰れる、とフランス公演の最終ピリオッドをうつ事ができた。

アトリエ公演に集まって下さった方達

ワールドカップ決勝戦でフランスが勝利した 7 月 16 日、町中で何時間も鳴り響くクラクションにヨーロッパ人、アフリカ人、アジア人も含む多民族国家が、フランスという枠組みの中で一つになったことに感動を覚えた。この国だからこそ、1400 公演が全て個性あるオリジナル作品であることができるのだろう。20 年以上も渡欧を続け、世界が一つになる場所に居続けられている自分は何という果報者であろうか。

アヴィニョンでの公演も一生懸命なスタッフに支えられ、ミスもほとんどなく無事に終えることができたことと、世界中から集まったパフォーマー達との暑くて熱い競演に深く感謝した。　　2018 年 8 月

アヴィニョン・フェスティバル・オフ 2018

花柳衛菊　日本舞踊公演 プログラム

7 月 13 日～25 日　午後 1 時

ガレージインターナショナルシアター

古の三人の女　いにしえのさんにんのおんな

1・踊り　常磐津　山姥
2・箏　春の夜
3・踊り　ゆれる～浮舟
4・箏　三つの断章
5・踊り　女武者・巴

A4 のオフプログラム誌(448 ページ)
表紙（私のメモあり）とガレージシアターのページ
左から 2 番目が　「古の三人の女」

踊り・振付(2,4)　：　花柳　衛菊（はなやぎえぎく）
箏　：　川口　悦子（かわぐちえつこ）